

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 18 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330226

研究課題名(和文) マナーと人間形成に関する総合的研究

研究課題名(英文) General study on manner and human being formation

研究代表者

加野 芳正 (KANO, Yoshimasa)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：00152827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,600,000円、(間接経費) 2,880,000円

研究成果の概要(和文)：私たちは、強制性を持つ法律などと違い、自主的な判断や自発的な配慮で守られる「マナー」や「礼儀作法」に着目して研究を進めた。そして、教育学におけるマナーと礼儀作法の研究の重要性を明らかにし、その社会的事象として現状や諸相について詳述し、さらに、そのような社会的事象を超え出る出来事を捉えるための思考を提示するとともに、それらに反省を加えるためのより原理的で包括的な研究手法の構築を目指した。この一連の研究成果は、『マナーと作法の人間学』(矢野智司編、東信堂)と『マナーと作法の社会学』(加野芳正編、東信堂)の二冊の書物として結実した。

研究成果の概要(英文)：In summary, how do Japanese people relate to manners and etiquette, and how has this substantially changed? What sorts of problems have arisen as a result of the loss of substance in manners nowadays? And what are we to do about manners in order to ensure that our children and young people grow up not only participating in public life, but also doing so with dignity and learning? The scope of manners is broad; it is not unrelated to the whole area of citizenship education, which has become more mainstream over the past few years. This research not only places manners and etiquette at the forefront of the issue, it also needs to consider the subject from the following five issues: (1) what the substance of manners comprises, (2) how manners have come about throughout history, (3) what the social function of manners is, (4) how manners have been preserved, and (5) how manners have been taught.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育学

キーワード：マナー 礼儀作法 教育人間学 教育社会学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) マナーを教育学の研究課題として位置づけ、開拓していくことである。マナーは、道徳と法の間位置づく準ルールである。その道徳については、倫理学、哲学、倫理学などが、法については法学がそれぞれ研究をカバーしているが、マナーや礼儀・作法を直接対象とする学問は不在である。もちろん、マナーに関する著書は数多いが、それらは「食事のマナー」「冠婚葬祭のマナー」などマナーの具体的な指南書であり、精神的なしつけ論である。しかし、マナー書が「～するべし」「～するべからず」のレトリックで書かれており、身体技法の形成を目指してきたことを考えると、マナー書は教育学書の前身でもある。したがって、教育学がこの問題を考えるのは当然であり、マナー研究は教育学研究の新しい地平を切り開くことができる。

(2) マナーは人間形成にとっての重要な実践的課題である。マナーは、他者や共通世界への関心・配慮・参加の成果として、協同して作り上げられる作品である。子どもにマナーを伝えることは、ヒトとヒトとの「あいだ・つながり」としての共通世界を開知させるものであり、また、マナーを守り実践する行為は、公共世界に参加しているという実感、悦びを伴う。他方で、マナーは、道徳としての義務でもなければ、法律による強制でもない、いわば「自由」が担保されている領域である。それ故、マナーを欠く行為が目につきやすく、それが人々を不快にさせる。したがって、人々はマナーにどのような意識を持っているのか、学校をはじめとした空間においてマナーをどのように育てていくかが、実践的研究課題として検討されなければならない。

(3) 「マナーの悪さ」という言葉で日常的に問題にされているという現実である。特に公共の場面における子ども・若者のマナーの低下が指摘され、それが今日の子ども・若者観に反映している。マナーは道徳原理のように義務としての普遍性を持っておらず、さらにそれ自体に合理的な根拠をもっていない。それは伝統として強制されることによって身に付くものである。そのため、もしその正当性の根拠が失われるなら、しつけとして強制する論理もなくなってしまう。その意味で、マナーについて私たち日本人がどのように向き合い、変質させてきたのか、マナーの形骸化はどのような問題を惹起しているのか、実証的に明らかにしていく必要がある。

## 2. 研究の目的

マナーは、道徳と法の間位置づく準ルールであり、この両者と関係しつつも独自の領域を形成している。マナーは教育によって身体化されるので、教育学の重要な研究課題であるが、これを正面からとりあげた研究書は皆無に等しい。本研究は、以下の3点について明らかにしていくことを目的とする。

(1) マナーを教育学の研究課題として位置づけ、人間形成にとってマナー(教育)のもっている意味はなにか

(2) 私たちの社会でマナーの問題はどのように受け止められており、また、公共的な世界に参加するとともに、品格と教養ある子どもを形成していくためにマナーとどのように向きあえばよいのか

(3) 学校教育や家庭教育、社会教育の問題と絡めながら、また、大学におけるマナー教育を初年次教育やキャリア教育と絡めながら、子ども・若者にマナーをどのように伝えていくべきか

## 3. 研究の方法

私たちが行ってきたマナーの研究方法は、大きくは二つの内容に分けることができる。一つはマナーや作法に関する理論的研究であり、二つはマナーに関する実証的(調査)研究である。

マナーに関する理論的研究は、人間学や哲学の立場から追究されたものと、主として社会学の立場から追究されたものに大別できる。実証的研究については、小学生、中学生に対する質問紙調査、小学生と中学生の保護者に対する質問紙調査が中心である。各方面の協力を得て、総数 8500 にのぼる調査票が回収されており、それを統計的に分析した。

## 4. 研究成果

私たちは、教育学におけるマナーと礼儀作法の研究の重要性を明らかにし、その社会的事象として現状や諸相を詳述し、そして、そのような社会的事象を超え出る出来事を捉えるための思考を提示するとともに、さらにそれらに反省を加えるためのより原理的で包括的な研究手法の構築を目指した。この一連の研究成果は、『マナーと作法の人間学』と『マナーと作法の社会学』の二冊として結実した。それぞれの図書の内容を紹介することで成果報告としたい。

(1) 『マナーと作法の人間学』(矢野編から)

矢野智司による「第一章 マナーと礼儀作法の人間学の再定義に向けて 儀礼論から贈与論へ」は、社会学と人間学を架橋しつつ、マナーと礼儀作法を包括的に考えるための学説史構築に向けての試論である。マナーと礼儀作法を包括的に捉える上で、最も重要と考えられる研究は、デュルケームが宗教社会学で論じた儀礼論である。デュルケームの儀礼論は、社会的秩序の形成に重きがあり、儀礼や礼儀作法が身分差や階層差を生み出していき、社会構築していく側面を捉えるには大きな力を発揮する。しかし、それでは共同体の外部から来る他者に差し出されるマナーを捉えるときには、むしろこの法外な出来事の性格をつかみ損ねてしまう。デュルケームの儀礼論から、ジンメル・ゴッフマンの社交論、デリダ・レヴィナスの贈与論へといった学説史の系譜を提示することで、マナー研究全体の見取り図を提示した。

櫻井佳樹による「第二章 近代西洋社会におけるマナーと社交性」は、マナーを近代西洋社会に成立した概念と現象であることを、歴史的に解明した。エリアスの「文明化」をめぐる議論を手がかりに、マナーが近代西洋の身分制社会のなかで階層差を自ら意識し、他の階層に属する者にその差を意識させる「差異化」の装置として機能したことを、具体的な歴史的な事象をあげながら明らかにしている。とりわけ啓蒙期ドイツにおける「文明化」としてのマナーの発展を、カントの『教育学講義』や、あるいは日本ではそれほど知られていないクニツゲの『人間交際術』などのテキストを提示しながら論じているところは、従来の研究に見られない論点である。

鳶野克己による「第三章 あいさつと超越性 祈りとしてのあいさつのために」は、毎日のように繰り返されている「あいさつ」という行為に、超越性の議論から新たな光を当てた。日々繰り返されているため、その重要性には気がつかないが、「あいさつ」は生の超越性に触れる営みであり、経済的合理性を超えた人間の「祈り」の問題とかわる事象である。そして「祈り」は、「あいさつ」の超越性が際立った形であらわになる営みとして位置づけられる。現行の指導要領には、「礼儀正しさ」の大切さが明記されており、学校教育においても重視されているにもかかわらず、その「礼儀正しさ」の大切さは、社会生活が円滑にいくためのいわば水平の

社会関係に回収されるものでしかない。鳶野は儀礼論に立ち返り、「あいさつ」に宿る超越性を明らかにするとどまらず、さらに学校教育での生き生きとして新鮮な「あいさつ」の教育の新たな在り方を提案している。

矢野智司による「第四章 世界市民の作法としての歓待と甲いのマナー 和辻哲郎の『土下座』を通して」は、やはり「あいさつ」の問題と関係している。哲学者和辻哲郎の倫理学を批判の手がかりにしつつ、仲間内の風土に根ざした「型」の作法ではなく、共同体の外部の他者に向けた倫理の「形」の可能性を世界市民の作法として論じた。和辻は、風土の厚みのなかで人間が育んできた作法の奥行きを教えてくれる哲学者だが、その作法は同胞へと向けられたものであって、仲間以外のものへは届かないものであった。和辻はそのことに気づきながら、この問題を問題として捉え損ねてしまったことを指摘している。この問題は他者への絶対の歓待と甲いの問題である。この歓待の「こんにちわ」と甲いの「さようなら」とは、第三章の鳶野の「あいさつ」の問題と呼応している。

岡部美香による「第五章 マナーと礼儀作法による『公共の場』の創成」は、一見するとマナー違反とも思える事象を手がかりに、マナーの本質に肉薄しようとするものである。岡部は、準拠集団のヒエラルキーへの適応というべき「世間」での「日常生活の安心を得るための作法」と、連歌や茶の湯に代表される「無縁の場」などでの「日常生活の安定をずらすための作法」とに分け、この両者の働きによって、マナーと礼儀作法は、人間関係や人間とものとの関係を再活性化してきたことを明らかにしている。しかし、この「世間」も「無縁の場」も現在の日本社会では失われている。そのような状況のなかで、マナーや礼儀作法が守られない際にずれを感じるとき、そのずれを媒介にして、人と人が新たに「公共の場」を創出する可能性に開かれているのだという。このずれを媒介にして「公共の場」を創出する際にも必要とされる作法があることを指摘している。この作法を生み出す作法の指摘は重要である。

毛利猛による「第六章 中学校におけるマナー問題と『粋(いき)』」では、実践的な立場からマナーの教育の新たな可能性が論じられている。毛利は教育学部附属中学校の校長を歴任している。ここでは校長職時代の五

つの講話を手がかりに、中学校での具体的なマナー教育の可能性を示している。毛利は中学生にマナーを守ることを意味を改めて問いつつ、損得関係に回収できないマナーの不思議さを提示する。さらに「生き方の美学」として「粋(いき)」について論じる。「傘かしげ」などの例を引きながら、「江戸しぐさ」が「粋(いき)」な「生き方の美学」の現れであったことを指摘し、義務としての人への心遣いとしてではなく、クールでかっこよい「生き方の美学」としてマナーを勧めている。私たちは、マナーの教育といえ、ともすれば規律のように外から押しつけるか、あるいは「やさしさ」といった内面に重点を置きがちだが、美的であることによる自己の規制というこれまでにない側面を明らかにしている。

(2) 『マナーと作法の社会学』(加野編から)

加野芳正による「第一章 マナーと作法の社会学に向けて」では、そもそもマナーとは何であるのかを、ルールや道徳と対比することによって考察するとともに、マナーは日本語では作法と訳されることが多いが、マナーと作法はどのように異なるのかを歴史を遡りながら明らかにした。その上で、マナーを主題として、どのような研究課題が立ち上がってくるのか、また、マナー研究の意義を明らかにした。

加野芳正による「第二章 現代社会におけるマナーの諸相」では、マナーという身体文化の歴史性に言及したあと、現代社会におけるマナーの特質について論じている。戦後における近代化のなかで、日本では作法の部分縮小し、ビジネスマナーや冠婚葬祭マナーが重視されるようになった。また、「マナーのルール化」や「法化社会」といった現象が進行しつつあり、マナーの領域がやせ細っている。他方で、マナーを人間形成という側面から見ると、マナーの成立は人間に「自己抑制」の観念を植えつけるとともに、文明化は人間の「不快」の感覚を拡大していくので、マナーに過敏な社会を招来しやすいことを明らかにした。

古賀正義による「第三章 『マナー不安』の時代 - 職場適応能力を物語る若者たち」では、教育困難校(高校)卒業生へのインタビュー調査を中心に、仕事にマナーがどのように関係しているかを明らかにしたものである。マナー検定の流行に象徴されるように、マナーが体得できないことによる職場不適

応に不安をおぼえる若者は少なくない。困難高校卒業生の追跡調査でも、社会に適應するためのスキルを獲得すべきだという声年ごとに強まり、現場で習得した接客技術が専門学校でのマナー教育の無益さを知らしめたといった語りが見いだされた。そこには、マナーの本質を離れ、市場的価値からマナーを読み取るまなざしが顕著であり、今日「マナー不安」の時代が到来している背景をなしていることを明らかにした。

松田恵示による「第四章 スポーツの身体性とマナー」では、サッカーを事例としてサポーターとプレーヤーのマナーが論じられる。時として、サッカーではフリーガンに代表されるサポーターの暴走が発生するが、サポーターとしての応援は「興奮」という自己の解放と、「マナー」という自己の抑制の微妙なバランスのうえに成り立っている。一方、プレーヤーを支配しているのはルールであるが、同時に「フェアプレイ」に代表される「マナー」や「作法」も重要視されている。このルールとマナーの微妙な空間のなかにこそゲームとしてのサッカーのおもしろさがあり、また、サポーターとの一体感が生じることを理論的に明らかにした。

村上光朗による「第五章 マナーのなかの子ども - 『子どものマナー』を考えるために - 」では、「子どものマナー」を主題に論じているが、そこには何かしら矛盾する響きが横たわっている。というのも、「子ども」はマナーを知らないが故に子どもであるという側面を持っているからである。子どもにとってのマナーとは、大人のマナー型を単に躰けられてゆく過程ではない。「けんか」の時の子どもなりの紳士協定など、子どもであるがゆえに所有しているマナー性があり、そのことを子どもと大人との位相関係から明らかにした。

越智康詞による「第六章 マナーを通して学校に公共空間を拓く」は、マナーや作法を通して、学校や学級での生活や関係をよりよくしていこうとする実践を、江戸しぐさを事例としながら検討した。学校は、大勢の子どもが共同生活を送る場であり、お互いに尊敬の念をもって交流するという点で公共空間である。その公共空間を創出するには、マナーや作法の力が必要であり、また、マナーや作法は生き方の美学(粋であること)とも結びついていることが論じられる。現代社会における生き方について、マナーをキーワ

ードとして論じた社会哲学的論考である。

西本佳代による「第七章 キャンパスの中のマナー問題」では、大学生のマナーの実態と大学におけるマナー教育の現状を検討した。近年の若者論と流れを同じくして、大学生のマナーについても否定的に語られることが多い。はたしてその実態はどうなっているのか、全国一九大学の学生を対象としたアンケート調査の結果から、現在の大学生のマナーに対する意識・行動を明らかにした。また、その結果を受け、大学で実施されているマナー教育の現状と課題を考察しており、大学教育論としても意義がある。

(3)小中学生及び保護者への調査から

小学生 1867、中学生 1726、小中学生の保護者 2293 のサンプルを収集した。データ分析の結果、育てたい子ども像について、保護者の 80%以上が「心のやさしい」「社会のルールを守る」を重視する一方、中学生の 68%が「勉強ができる人になりたい」を重要と考えている意識の違いなどが明らかになった。また、マナーをどこで学ぶべきかについて、保護者の 9 割が「家庭」と回答したが、中学生が「よく教えてもらう」のが「学校」(52.2%)で「家庭」(49%)を上回っていた。保護者がマナー教育で「非常に重視」するのが「あいさつ」(79%)、「感謝の気持ち」(69%)、「悪いと思ったら謝る」(69%)などである一方、「食事の作法」「年上への敬意」については 4 割以下だった。ここから、伝統的な礼儀作法の教育より、市民的対人関係における気配りが、現代社会では重視されていることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 19 件)

加野芳正「近代の学校教育制度と暴力 - 『いじめ』と『体罰』を中心に - 」「スポーツ社会学研究」第 22 巻 1 号、2014 年 3 月、7-20 頁

加野芳正・村上光朗・西本佳代・古賀正義・越智康司・松田恵示「育てたい子ども像と躰・マナーの位相 - 保護者への質問紙調査の結果から」香川大学教育学部研究報告第 部第 141 号、2014 年 3 月、1 - 24 頁

西本佳代・村上光朗・古賀正義・越智康司・松田恵示・加野芳正「子どものマナーと作

法 - 保護者への質問紙調査の結果から」香川大学教育学部研究報告第 部第 141 号、2014 年 3 月、25 - 42 頁

加野芳正「海外のいじめ問題について - イギリスを中心に」『犯罪と非行』(公益財団法人 日立みらい財団) No.176、2013 年 9 月、137-152

Yoshimasa KANO、Sociological studies on manners, The 19<sup>th</sup> Taiwan Forum on Sociology of Education and ISA-RC04 2013 Midterm Conference、Conference Handbook 2013.6、pp.65-72

加野芳正「『いじめ』とは何か、なぜ起こるのか」健康教室(東山書房) 2013 年 1 月号、10-12 頁

Yoshimasa KANO、Japanese Sociology of Education -Past, Present, and Future. 第 11 回教育経営管理学会学術研究会議手帳論文集(台湾)、2012.11 専題 7-1~7-9

加野芳正・西本佳代「キャンパスの中のマナーとルール」『IDE 現代の高等教育』No.542(2012 年 7 月号、2012 年、63 - 69 頁

西本佳代・村上光朗・古賀正義・越智康司・松田恵示・加野芳正「大学生のマナーに関する実証的研究(下)」香川大学教育学部研究報告第 部第 136 号、2011 年 11 月、1 - 13 頁

〔学会発表〕(計 12 件)

加野芳正「近代の学校教育制度と暴力 - 『いじめ』と『体罰』を中心に - 」日本スポーツ社会学会第 23 回大会、北海道大学、2014.3

加野芳正「歴史のなかの子どもと仕事」日本子ども社会学会第 20 回大会、関西学院大学、2013.6

西本佳代「家庭におけるしつけの現状 マナーに着目して」日本子ども社会学会第 20 回大会、関西学院大学、2013.6

Yoshimasa KANO、Sociological studies on manners, The 19<sup>th</sup> Taiwan Forum on Sociology of Education and ISA-RC04 2013 Midterm Conference in Taipei, Taipei Branch, National Academy for Educational Research, 2013.6

Yoshimasa KANO、Japanese Sociology of Education -Past, Present, and Future, 第 11 回教育経営管理学会学術研究会議、国立台南大学(台湾) 2012.11

加野芳正・村上光朗・西本佳代・古賀正義・  
越智康司・松田恵示「子どものマナーと作  
法 小中学生および保護者への質問紙調  
査を中心に」日本教育社会学会第 64 回  
大会、同志社大学、2012.10

古賀正義「『「ソーシャルスキル」の語り  
からみた困難を有する若者たち 教育困  
難校卒業生追跡調査 8 年目の結果から 』  
日本教育社会学会第 64 回大会、同志社大  
学、2012 年 10 月

古賀正義「困難を有する若者にとっての  
『ソーシャルスキル』 教育困難校卒業生  
追跡調査 8 年目の結果から 」日本教育学  
会第 71 回大会、名古屋大学、2012 年 8 月

鳶野克己「彼方へのあいさつ / 彼方からの  
あいさつ - 『おはようございます』の教育  
人間学 - 」教育人間学会第 5 回大会、立命  
館大学、2011 年 11 月

鳶野克己「『かけがえのないあなた』をか  
な(愛・哀)しむ - 中原中也『月夜の浜辺』  
をてがかりに - 」教育人間学会第 6 回大会、  
立命館大学、2013 年 1 月

#### 〔図書〕(計 17 件)

加野芳正編『マナーと作法の社会学』東信  
堂、2014 年 6 月予定 約 250 頁

矢野智司編『マナーと作法の人間学』東信  
堂、2014 年 6 月予定 約 200 頁

矢野智司『幼児理解の現象学 メディアが  
開く子どもの生命世界』萌文書林、2014  
年 3 月、全 310 頁

加野芳正・越智康詞編『新しい時代の教育  
社会学』ミネルヴァ書房、2012 年、218 頁

加野芳正「マナーからみた子ども社会」原  
田彰・望月重信編『子ども社会学への招待』  
ハーベスト社(全 263 頁)、2012 年 7 月、  
31 - 54 頁

加野芳正『なぜ、人は平気で「いじめ」を  
するのか?』日本図書センター、2011 年 9  
月、292 頁

和田修二・皇紀夫・矢野智司共編著『ラン  
ゲフェルト教育学との対話 「子どもの人  
間学」への応答』玉川大学出版部、2011  
年 6 月、392 頁

#### 〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

加野 芳正 (KANO Yoshimasa)  
香川大学・教育学部・教授

研究者番号：00152827

##### (2) 研究分担者

矢野 智司 (YANO Satoji)  
京都大学・教育学部・教授  
研究者番号：60158037

##### (3) 研究分担者

鳶野 克美 (TOBINO Katumi)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号：90411149

##### (4) 研究分担者

村上 光朗 (MURAKAMI Mituaki)  
鹿児島国際大学・福祉社会学部・准教授  
研究者番号：70166263

##### (5) 研究分担者

古賀 正義 (KOGA Masayoshi)  
中央大学・文学部・教授  
研究者番号：90178244

##### (6) 研究分担者

越智 康詞 (OCHI Yasusi)  
信州大学・教育学部・教授  
研究者番号：80242105

##### (7) 研究分担者

毛利 猛 (MOURI Takesi)  
香川大学・教育学部・教授  
研究者番号：50219961

##### (8) 研究分担者

櫻井 佳樹 (SAKURAI Yoshiki)  
香川大学・教育学部・教授  
研究者番号：80187096

##### (9) 研究分担者

松田 恵示 (YANO Satoji)  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号：70239028

##### (10) 研究分担者

岡部 美香 (YANO Satoji)  
大阪大学・人間科学部・准教授  
研究者番号：80294776

##### (11) 研究代表者

西本 佳代 (NISHIMOTO Kayo)  
至誠館大学・ライフデザイン学部・講師  
研究者番号：20536768

##### (12) 連携研究者

湯川嘉津美 (YUKAWA Katumi)  
上智大学・総合人間学部・教授  
研究者番号：30156814